

# 經濟論叢

第十七卷 第二號

---

日本の近代化と洋学および儒学……………堀 江 保 藏 1

所得倍增計画と公共投資(一)……………島 恭 彦 22

シャフツベリの道德哲学(二)……………平 井 俊 彦 38

---

昭和三十六年二月

京都大學經濟學會

# 日本の近代化と洋学および儒学

堀江保蔵

## 一 はしがき

明治維新は、単なるブルジョア革命でもなければ、単なる絶対主義革命でもなかった。それは、政治からはじまって経済・社会にまで及ぼされた変革であつて、変革の目標は欧米化（westernization）を主たる内容とする近代化であり、その目的は西洋諸国と対等の地位に立ちうる近代國家の建設であつた。

幕府は維新によつて倒されたが、それを指導し担当したのは、薩長を中心とする反幕藩の下級武士であつた。彼らのあいだには、たとえば伊藤博文や井上馨のように、幕末にイギリスへ密航して見聞を改め、攘夷論から開国論へ転向したものもあり、横井小楠のような開明的な儒学者もあつたが、それは、彼らが、西洋の富強が商工業の繁栄を基礎としていることを知つたからであつた。のちにのべるように、幕末には蘭学を主とする洋学の興隆にはめざましいものがあつたが、これによつて取入れられた西洋流の社会経済思想が彼らを駆つて変革運動に身を投じたものではなかつた。この運動の思想的背景となつたものは、天賦人權思想や民権思想ではなく、むしろ先達諸外国の外からの脅威に対する危機意識であつた。すなわち、当時の攘夷思想は、外国人を蛮族視する中国的思想が、

思想的には国体論に、政治的には開鎖是非論に、それぞれ結びついて、しだいに激本主義（倒幕論）の性格を強めていったものであつて、その根底には、国家の存立が脅かされているという危機意識が控えていて、それが変革運動をゆりうごかしたのである。そのような危機意識がなぜそれほど——変革運動となつて展開するほど——強かつたかについては、儒学的思想ないし教養の浸透以外には考えられないであらう。

以下、維新の前夜までの蘭学＝洋学の発達を概観し、つぎに洋学者の社会経済論を通じて、その洋学受容の態度をみ、最後に儒学におけるナシ＝ナリズムを掲げ、もつて、儒学的教養の上に取り入れられた西洋に関する知識が我が国の近代化に果たした役割を考へることにしよう。

- (1) 相良亭「近代思想受容の学問的前提」(講座「近代思想史」第九卷、日本における西洋近代思想の受容) 八八頁。

## 二 蘭学(洋学)の発達

寛永の鎖国以後における西洋の学問ないし思想の唯一の受入口は長崎であり、受入れた人は最初はオランダ通辞であつた。<sup>2)</sup> 彼らの中には西洋の学術に関心をもつたものも少なからず、とくに有名なのは、享保から寛政にかけて、外科の医師をうたわれた吉雄耕牛であつて、その門から多くの学者が輩出した。前野良沢や杉田玄白も彼から教えを受けた人々である。長崎が蘭学の淵藪となつたのは、いうまでもなく、ここにオランダ商館があつて、オランダ人から直接に教えをうける機会が多かつたからに外ならない。幕末には幕府もこの地に医学伝習所を設けた。オランダ人の中でわが国の学術の発達に貢献があつた有名な人には、商館づき医師ツンベルグ(Thunberg、安永四年着任)、商館長チチング(Tisingh、安永八年着任)、医官シーボルト(Siebold、文政六年着任)、長崎伝習所の教授に招かれたポ

ンペ (Compe、安政四年着任) らがあつた。以上のように、江戸時代のはほとんど全期を通じて、蘭学の受入口として長崎が占めていた地位はすこぶる重要であつて、いやしくも蘭学に志し、名をあげようとした人々は、必ず一度は長崎へ遊学したものである。

しかしながら、蘭学が研究されたのは長崎だけに限られなかつた。まず江戸においては、元禄から正徳へかけて、儒学の各流派が一せいに花を開いたころ、蘭学に関心をもつものが現われた。新井白石が「采覧異言」や「西洋紀聞」を書いたのはそのときである。つづいて享保年代に入り、將軍吉宗が学問を実学主義に向させたことから、蘭学興隆の氣運が盛んになつた。そして明和・安永のころ、前野良沢 (中津藩医) と杉田玄白 (小浜藩医) が中心となつて「解体新書」が刊行されるにおよんで、江戸蘭学の基礎が定まつた。すなわち、天明・寛政ごろには、これら両先賢の門から出た大槻玄沢 (磐木)、宇田川玄随 (越前) らが活躍し、文化・文政・天保のころには杉田成卿 (玄白の孫)、坪井信道、戸塚静海、伊東玄朴らがその名をうたわれた。いずれも医学者であり医師であつたが、その門から出た多くの人々のなかには他の方面に志す人も現われた。鹿兒島藩士松木弘安 (のちの寺島宗則)、佐賀藩士佐野常民、幕臣神田孝平などはその例である。

幕府も、その天文方において、享和三年以降、天文・測地に加うるに洋書翻訳の事業をもつてし、文化八年には新たに蛮書和解御用という一部局を設けて、外国文書の翻訳に備へることになつた。洋学所は、安政二年にこの局が独立してできたもので、翌三年に審所調所と改め、箕作阮甫、杉田成卿、川本幸民らの蘭学者を教授方に任じ、同四年に生徒を集めて開校した。その後英・仏両学を加へ、化学の一科を置き、また独・露両語学を加へるなど、しだいに内容を充実し、文久二年に洋書調所と改称、同三年さらに開成所と改め、もつて幕末にいたり、慶応二年

にははじめてオランダ人を招聘して教師とした。この学校の入学資格は、はじめ旗本・御家人の<sup>まがれ</sup>忤<sup>つひ</sup>厄介となっていたが、文久元年には陪臣の忤厄介にも入学を許すこととし、翌年には入学資格の制限を撤廃し、同時に研究方・教授方に陪臣からも人才を抜擢することにした。このようにして洋学者の地位が高められ、洋学の普及発達は大いに促進されたのである。

京都においても、杉田玄白の影響をうけた小石元俊が塾を開いてから蘭学が発達してきた。とくに有名なのは、文政元年に蘭法医家を開業した、丹後由良の人、新宮涼庭であつて、彼には「破れ家のつづくり話」と題する政治・経済に関する著書もある（後述）。大阪の蘭学は、寛政年間に、傘の紋かきを業としていた橋本宗吉によつて始められた。その著述は地理・天文・物理・医学等にわたっているが、特筆すべきは「窮理原」に示されている電気の研究だといわれている。天保年間には高良齋が、徳島からこの地へ移つて、新式の眼科・婦人科を唱え、また同じころ、備中の国足守の人、緒方洪庵（文化七―文久三）も来つて、医を開業するとともに、適々塾を開いて門弟の養成にあたった。この塾は幕末における全国随一の蘭学塾であつて、そこから出た著名な医学者には長与専斎その他があり、維新の大業に関係した政治家には橋本左内、大村益次郎、大島圭介らがあり、教育関係者には福沢諭吉、箕作秋坪らがあり、明治新政府の学者的官僚には若山儀一があり、そのほか多数の偉才を送り出している。

以上のほか、徳川後期には全国各地に蘭学が起り、多くの蘭学者、主として蘭医が輩出したが、幕末になると、藩みずから蘭学の奨励に乗りだすものが相ついで現われた。奨励の方法としてふつうに用いられたのは、藩校の教授科目に蘭学を加えることであり、別に洋学所を設けたものも少くなかった。藩主にして蘭学を愛好したものも多く、とくに鹿児島藩主島津重豪<sup>しげたか</sup>は、福知山藩主朽木昌綱らとともに、いわゆる蘭癖大名として知られ、天明八年に

はみずから出島を訪問している。

以上のように、享保年代以降、蘭学が逐日発達してきた。その温床となつたものは、すぐ前の年代（元禄—正徳）における儒学の開花であつた。杉田玄白は、蘭学の発達が速やかであつたことについて『実は漢学にて人の智見開けし後に出たる事ゆへ、かく速かなりしか知るべからず』（「蘭学事始」）といつてゐる。儒学のなかでとくに注意すべきは古学であろう。それは、後儒（先賢に対する後儒の意）の説に拘泥することなく、すべからず周公・孔子の眞精神に立返るべきことを主張したものであつて、後世の因習や学説や理屈にとらわれず、根源にさかのぼつて事物を究明しようとする態度をとり、学風は実用的・經驗的・歴史的となる傾向をもつていたから、おのずから經驗主義的な蘭学—洋学を受けいれやすい知識人を養成する結果となつたのである。

蘭学のうち、まず取入れられたのは本草・医学であり、第二は天文学・測地学・曆学であり、第三は兵学であつた。本草・医学は国民の日常生活に深い関係のある学問であつたから、それがまず取入れられたのは当然であるが、同時に注目すべきは、医者や医学者になることは、身分を超越して立身出世する近道だつたことである。天文曆数についても同じことがいえるであろう。こうして、蘭学者は、オランダ通辭をはじめとする下級役人、学問によつて身を立てようとした下級武士、固有の武士でない藩医、あるいは町人・百姓など、社会のあらゆる方面から輩出することになつた。これらの人々が、全体として、既成の儒学、とくに御用学としてほとんど何らの進歩も示さなかつた朱子学にあきたらない人々であつたであろうことは、容易に推察される。<sup>4)</sup>

幕末に對外關係が切迫するにおよんで、第三の兵学が取入れられることになつた。兵学は、医学とちがつて、國家の存立と發展に関するものであつたから、当然に主として武士によつて研究された。幕府をはじめ諸藩が蘭学の

奨励に乗りだした事情もそこにあつた。それとともに注目すべきは、兵学が兵学だけに止まりえなかつたことである。すなわち、近代兵学は砲術・航海術・造船技術などの関連部門はもとより、物理学・化学・数学などの基礎部門の発達を要求し、進んで、兵器を製造し維持し、もつて軍備を充実するためには、国を富ますことが前提条件となるところから、近代的な生産技術や経済に関する知識を要求した。こうして、蘭学と称するものの内容はきわめて広範になつてきた。

そのころとくに日本人の興味をひいたのは機械技術であつたらしい。これについてポンペの「医務報告書」(安政四、五年)には『日本人は理化学の手段によりて、彼らの工業を発達せしむることが出来ると期待している』とあり、鹿兒島藩で松木弘安が、機械学に関する蘭書を唯一のたよりに、小さい汽車を造つたこと、九州諸大名のなかで筑前・肥前の二侯がもつとも科学知識を発達させていること、などが報告されている。別の資料によると、鹿兒島藩では船用機関のひな型もつくられて<sup>6)</sup>いるし、佐賀藩では、嘉永年間以降、反射炉を築いて鋳砲事業に成功したばかりでなく、汽船や汽車のひな型をはじめ、西洋型帆船、蒸気汽罐をつくり、慶応元年には汽船の建造に成功している<sup>7)</sup>。このような例は全国にわたつて方々にみられるが、大抵の場合、西洋技術学の基礎の上に、日本人の手で行われたものであつた。

そのなかでとくに目をひくのは、鹿兒島藩において、島津斉彬の遺志をつぎ、主として蘭学者石河正龍の努力によつて、綿糸紡績技術が移植されたことである。機械の掘えつけならびに運転はイギリス人技師の指導のもとに行われたが、それはともかく、慶応三年に操業を開始した鹿兒島紡績所は、洋式近代技術にもとづくわが国最初の経済事業であつた。しかもその建設の目的は、「強兵」を維持すべき「富国」を達成せんとするにあつた。一般に幕

末における洋学の熱心な研究は、富国強兵という理念——国家的危機意識——に導かれて行われたものといふことができる。佐久間象山が君子の五楽の第五として『東洋の道徳、西洋の法（學術の意）、精粗遺さず表裏兼該し、因つて以て民物を沢にし、国恩に報ゆるは、五の楽しみなり』といっているのは、当時の洋学に対する日本人の態度を代表しているものといつてよいであらう。

ひるがえつて、いわゆる蘭学は決してオランダだけの學術ではなく、オランダ語を通じてではあるが、ひろく西洋の科学であり學術であつた。このことが、幕末に、とくにペリーの来航以後、米・仏・英・露・独等の語学およびそれらの国情や學術の研究を派生・発達させたゆえんである。とくに横浜開港以後になると、洋学の中心は蘭学から英学にうつり、たとえば福沢諭吉は率先してその道を歩んだが、同時に横浜・江戸には英学熱が盛んに起つて、多くの英学生を生むことになつた。

さらに蘭学が及ぼした學問的影響の他の一面をみると、儒学者も國学者も多少ともに蘭学の影響をうけることになつた。たとえば國学者平田篤胤は、異國ぶりを排撃しながらも蘭学に関心をもち、それによつて自家の武器を磨いている。また、國学者で、蘭学を収入れて広く世界に知識を求むべきことを唱導した人に、津和野藩士大國隆正があるが、さらに佐藤信淵にいたつては、儒学の基盤の上に神道（平田系）と蘭学（宇田川玄隨門）とを併せ学び、もつていわゆる佐藤家家学を大成した人であつた。

以上要するに、江戸時代中期以後の蘭学の発達には目を見はらせるものがあつたが、それに土壤を提供したものは、繰返し述べるように、儒学であつた。蘭学は医学・本草学の分野からはじまり、学習の目的は社会福祉もしくは立身出世にあつたが、対外關係が切迫するにおよんで、兵学を中心に理化学・技術学分野の研究が盛んになり、



その目的も富国強兵を第一義とするようになった。

ところで問題になるのは、その富国強兵の思想であるが、それは蘭学から借りた部分もあるいはあったかも知れないが、主としては儒学によって培われた思想であった(後述)。換言すれば、儒学の普及・浸透によっていまや伝統的となった富国強兵思想の上に蘭学が取入れられた、というよりも、むしろこの思想が根底にあったがゆえに、その実現を期する手段として蘭学の研究が活潑に行われた、という方が近いであろう。繰返していえば、各藩ないし日本の富強を実現するために知識を世界に求めたというのが、とくに幕末における蘭学の奨励および興隆の一般的状态であった。蘭学を通じ、またペリーをはじめ多くの欧米人に接して、日本人の西洋に関する認識はしだいに改められていった。これを端的に示すものは幕府が設立した洋学校の名称の変化である。もちろん、認識を改めたのは一部の先覚者であつて、国民大衆全体ではなかつた。これは当時としてはやむをえなかつたが、しかし、維新の変革運動に直接に関与したのがこれらの先覚者であつたことは、日本にとっては非常に幸せであつた。なぜならば、このような認識によつて日本および日本人を改めて自覚した人たちが維新において指導的役割を演じたからこそ、わが国は、他の後進地域諸国でみられたような混乱に陥ることを免かれて、すみやかに近代化の道を歩むことができたからである。このように考えると、蘭学＝洋学は、幕末維新时期におけるよき指導者をつくりあげたという点で、まことに重要な意義をもつものであつたといわれねばならぬ。

(2) 以下主として、板沢武雄「蘭学の発達」(岩波「日本歴史」、第七卷所収)による。

(3) 佐藤誠実「修訂日本教育史」三二五頁以下。

(4) 平凡社「世界歴史大系」第一三卷(B)、「日本史」第三冊、二八四―五頁参照。

(5) 板沢武雄、前掲、六四頁。

(6) 「薩藩海軍史」上巻、六一〇頁。

(7) 日本経済史研究所編「幕末経済史研究」七四頁以下。

### 三 洋学者の経済思想

前節において、蘭学＝洋学が、儒学流の富国強兵思想の上に、いわばそれを実現するための手段的学問として取入れられたことを述べた。このことは経済思想においても例外ではなかった。以下、数人の思想家についてそれを見よう。

本多利明 延享元（一七四四）—文政四（一八二二）

利明は越後に生れ、江戸に出て、関孝和の高弟今井兼延について数学を、千葉歳胤に天文学を学んだ人で、その門からは最上徳内が出ている。数学・天文学を学んだのは、実用の学をもって濟世に役立てようとするにあり、たまたま天明の大飢饉の惨状を目のあたりにみ、また明和年間以降、蝦夷地の風雲やや急なるをみて、意を蘭書に向け、その知識にもとずいて経済政策に関する多くの著述をなしたのである。その内容は、官營海運論、外国貿易論、植民地開発論、海外経略論、河道開鑿論、産業奨励論、米価および物価論、人口論など多方面にわたっているが、ここでは彼の蘭学者としての特徴がどのように現われているかをみることにしよう。

『……上下とこそ替れ、同じ人間なれば、国君たる人思い計り給うべきことなり』（『経世秘策』）とか、『領国の庶民は天民にして預り者ならずや』（同書）といひ、また將軍や諸侯をもって万民の父母にたとえているように、彼

の人間観はやはり一般の儒学者のそれと少しもちがっていない。社会構造についても、士農工商遊民の別および上下の身分関係を何ら疑っていない点でも、儒学者的であったといわねばならぬ。さらに経済政策論をみると、その目的は、一方では農本主義的であると同時に、他方では富国強兵の表現を期するにであった。この両方の目的を併せ実現する方法として、彼は「経世秘策」において、焰硝の製造、金銀銅山の開発と保持、船舶による通商、属島の開発をもって四大急務だと論じているのであって、そのうち、とくにここで取上げたいのは、第三の船舶による通商である。

これについて、利明は、いまさし日本の国内限りのやりくり経済ではどうにもならないといい、外国貿易の必要（貿易によって物資を豊かにする必要）と利益（彼我双方の利益）とを力説しているのであって（『経済放言』）、この点で彼は積極的開国論者の先駆であったといえる。しかし、ひるがっえて、一般に渡海運送のことを誰の手で行うのかというと、彼は商人商業をいたるところで否定し、人君（天子、將軍）もしくは国君（諸侯）みずからこれを行うべきであるとして、『渡海運送交易は国君の天職なれば、商民に任すべきに非ず』（『経世秘策』）とか、『歐羅巴諸国は国王あって、万民を撫育するに渡海運送交易を以飢寒を救ふを国王の天職とせり』（同書）といい、また、交易に商人の家業と国君の天職との差別があることが理解されていないから渡海の道が開けないのだ、ともいつている。この考え方は、当時オランダが東インド会社に東洋貿易を独占させていたことを国王による独占貿易であるのみで立てられたものであるが、それはともかく、君主はみずから商業をすべきではない、あるいは、してもそれは正道でないというのがふつうであった儒家流の考え方を否定したものであって、当時としては非常に進歩的な説であった。

利明に及ぼした蘭学の影響はつぎの点にもみられる。国政がうまくゆくためには、国君が徳器であること、および執政・有司にその人を与えることが大切であるが、とくに有司については、数多きなかから人才を選ぶべきだとしている点〔経世秘策〕「西域物語」、武器によってではなく、世論によって政治の秩序を保ち、外国に備えるべきだと説いている点〔西域物語〕などであろう。

要するに、利明は、渡海通商をもって一國の富盛をはかるべしとし、その通商は国君が掌握すべきだとした点で、一種のマーカントィリストであったといえる。しかし、国君の任務、国家目的、社会構造、とくに商人の地位についての見方・考え方は、いぜんとして儒家流であった。この意味で、彼を過渡的な思想家であったということもできるが、それよりも、儒学的国家理想を西洋流の経済技術によって達成しようとした、いわば統合思想の持主であったとする方が適當であろう。

#### 山片蟠桃 延享三（一七四六）—文政四（一八二一）

大阪の町人学者山片蟠桃は蘭学者麻田剛立について学んだ人であって、その政治論・経済論は大著「夢の代」<sup>3)</sup>に体系的に叙述されている。本書において彼は「西洋歐羅巴の人々は天下万国に渡りて、天文を明らかに地理を察し、世界の大きなる全体を弁へ、忠孝仁義のことは本より、致知格物のことのみに耽りて、諸芸諸術の無用のことに日を費すことなく、文字は纔に二十六字の真行草と、よせ字・方字・数字等にて百字ばかりなれば、十歳までには国字を学び尽して、知を致し物をいたすにかかること故に、その智術の弘きことしるべし」とのべて、西洋人を称揚し、ただし「其外国に心を用ひ遠略をつとめ、珍物を得て諸国を属せしめんとするものは過たりと云べし」と難じ、「外国をとることはいらざることなれども、せめては外国より我國を侮らぬ備へこそ有たけれ」と説いている。

このような個所をみると彼はいかにも蘭学者らしいが、しかしいざその経済論になると、全く儒学的見解から一歩も出ていないように思われる。たとえば、同書第五卷(制度)には『夫百姓は国の本也、生民の首たり。百姓なくばあるべからず、工商はなくてもすむべし。常に百姓に利を付て上席に置、工商には損をつけて下席に置べし』とあり、また第六卷(経済)には『国を治むるは、百姓をすすめ工商を退け、市井を衰微さすにあり。市井盛なれば田舎衰ふ、田舎さかんなれば市井おとろふ、自然の符なり』とのべて、儒学流の農本思想をはつきりと示している。その上、封建制度を称讃して『封建は天下を治るの道也、郡県は秦の始皇に初りて私の法なり』といっているのであって、要するに、彼の政治経済論に閃する限り、蘭学の影響は少しもみられないのである。

#### 新宮涼庭 天明七(一七八七)―嘉永七(一八五四)

蟠桃についてのべたことは、蘭医新宮涼庭にもそのままではまるであらう。涼庭は蘭法医術をもって産をなし名声を博した上、さらに国を医すことを念願した人であって、政治・経済に関する著書に「破れ家のつづくり話」がある。彼によれば、経済は儉約の二字に尽きるのであって、『今の世を救ふ術は、聖人出るといへども、質素儉約より外のことは決してなきことにて……』ともいつている。また『真の国益と申すは、一言に尽きたることにて、農業を勧め産業を励まして、国中に懐手して食ふ者のなきやうにするなり。……百姓減じて商人ふへるは日本国中の損失にて、自国ばかりの損失にあらざるなり』とのべて、儒学者流の農本思想をはつきりとうかがわせている。彼が、医学以外においては完全な儒学信奉者であったことは、つぎの言葉によっても明らかであろう。『何分にも初学は宋儒の書を読みて其説を会得し、先づ誠意正心より致知格物に至るまで、其深意を明らかにし、仁義礼智信の五常は、人たるものは身体に備りあれば、これ道に離るることはならぬものにして、離れては人にあらずと云ふ

やうの理をさとり……』

神田孝平 天保元(一八三〇)―明治三二(一八九九)

時代を下って、神田孝平をみよう。孝平は岩手の城主竹中氏の下級藩士の家に生れ、少・青年期には漢学を学んだが、ペリーの米航を機として蘭学に転じた人。文久二年幕府に聘せられて蕃書調所の教授方出役となり、維新に際して、新政府の召に応じた。その著述のなかでまず注目すべきは「農商弁」<sup>11)</sup>(文久元年)であつて、それはつぎの言葉ではじまっている。『商を以て国を立つれば、其の国常に富み、農を以て国を立ば其の国常に貧し。東方諸国は農を以て国を立て、西洋諸国は商を以て国を立つ。故に東方諸国は常に富しく、西洋諸国は常に富めり』と。商業立国の利益について、第一に加工価値、第二に転売によつて生じる価値をあげ、第三の利益として、農業からの収税を省きえて、農業もまた繁栄するであろうことをあげている。したがつて、彼の商業立国論は、商工業だけに依存せよと説いたものではない。むしろ農業を尊重した点で、儒学者に劣るところはなかつたと考えられるが、彼が商業を重んじたのは、商業がすでに発達した現状において、いつまでもあり来りの農本主義を固執していたので、逆に農業が衰える必然性を喝破したところに、彼の思想の新らしさがあつた。曰く『商は元より富むべきものなり。故に外国貿易の事起らざる前より、既に商人の権強し。況や貿易開けんとする時に当て、猶ほ何日迄も旧来の農法を固執せば、農民は次第に商人となり、田野次第に荒廢し、国家の経済次第に窮蹙し、海陸武備次第に弛廢し、而して商のみ日に外人と親しみ、利権を擅にし、勢威日に張皇に至るべし。一旦非常の事あれば其の害測るべからず。農を以て国を立るの言是れ其の三なり』と。

その上で、彼は、自利心を肯定する西洋人の考え方が、いたずらに道徳を説く東洋人の考え方よりも、仁政の実

現という点でまさっていることを、つぎのように述べている。曰く『我邦漢土等は、仁政を以て租税を免すなり。西洋人は利を以て租税を収らざるなり。仁と利とは元より同日の論にあらず。然れども、農民の其の恵みを蒙るに至ては、一年と永久と、万々同じからざるものあり。我邦漢土等にては、仁政の名ありと雖ども、深く其の本を推せば、却て西洋商法に仁政の実あるに如かず。然らざれば、西洋人何如に癡黠なりと云へども、焉ぞ能く既に白国の民心を一致せしめ、余力を以て万国を経略するに至らんや。故に我断じて曰く、一年づつの仁政は永久の仁政に若かず、和漢古聖人の法は方今西洋商人の法に若かず。然りと雖ども、和漢古聖人の智甚深し。若し再び当今の世に生れば、必ず時に依り変に従ひ、至大至仁の政を立べし。然らば則ち農法の小仁を捐て商法の大仁を取らんこと、亦已に明かなり』と。そして同書の最後に『何卒旧制を一変し、農税を次第に省き、工商を次第に盛にし、貿易を四方に行ふことを主とすべし。左すれば土地自ら開け、人心自ら服し、収入自ら増し、武備自ら整ひ、上下自ら富み、国勢自ら一振すべし』と結んでいる。

そこにみえる国家主義的見地をもっとも簡明に示しているのは、慶応四年に書かれた「日本国当今急務五ヶ条の事」<sup>12)</sup>であつて、そこには、日本が永久の独立国たることの要件として、国力の充実、人心の一致、中央集権的統一が掲げられ、その統一を実現するためには『政府に於て日本国中の衆説を採るべし、決して一方の説に泥むべからず』と書かれている。彼の胸中にはおそらく西洋流の統一的近代国家の姿が浮んでいたのであろう。

### 福沢諭吉 天保五（一八三四）—明治三四（一九〇一）

福沢諭吉になると、その西洋的な社会経済論はもっとはっきりしてくる。その最初の著述は「唐人往来」<sup>13)</sup>（文久年間執筆）であるが、そのなかで彼は、一国の独善主義は結局その国を滅ぼすものであることをシノの例をひいて説

明し、つぎに外国貿易は国々のあいだに余剰生産物が取引されることであつて、益にこそなれ、決して害になるものでないことを説き、同時に、貿易はこれを商人に委ねるのが一番よい方法であるとして、『勿論、交易する者は双方町人の事なれば、直段安く、商売にして引合ふ物を互に売買するは、町人根性当然の理……』といつてゐる。そして、当時、貿易の開始にともなつて物価が騰貴し、諸人が難渋におちいつたとの説に對しては、事物の一面しかみていない説であると反駁し、貿易開始にともなつて仕事（雇用）が増加し、所得もしたがつて増加した事実を掲げている。同書の結論には『今日にもせよ、一番思立ち、漢学や槍術などは先づ次のことにして置き、歐羅巴風に見習ひて蒸気船も沢山に拵へ……』とあり、いかにも福沢が欧米心酔論者であつたかにみえる。しかし、彼が欧米文化の移植を説いたのは、その跋文に『吾々洋学者流の目的は、唯西洋の事実を明にして、日本国民の変通を促がし、一日も早く文明開化の門に入らしめんとするの一事のみ』とあるように、西洋文化を日本の独立と繁栄の手段だと考えていたのであつて、ここにも神田孝平におけると同様のナシヨナリズムがうかがわれる。

福沢の思想をいっそうよく表わしているのは「西洋事情」<sup>14)</sup>（慶応二年刊行開始）である。同書は、これまでの洋学に欠けている点、すなわち西洋の政治・経済・風俗・歴史などに関する知識を、ひろく日本人に知らせようとして書かれたものであつて、その材料となつたのは、彼が文久元年から二年にかけてヨーロッパへ赴いたときの見聞手記と、政治・経済に関するイギリス人の著述とである。その初編第一巻のはじめに、ヨーロッパの学者が説くところの、文明の政治の要訣六カ条——自主任意、信教、技術文化を励まして新発明の路を開くこと、学校を建て人才を教育すること、保任安穩、人民飢寒の患なからしむること——を掲げ、第一条について『国法寛にして人を束縛せず、人々自から其所好を為し、士を好むものは士となり、農を好むものは農となり、士農工商の間に少しも區別



を立てず、固より門閥を論ずることなく、朝廷の位を以て人を軽蔑せず、上下貴賤各々其所を得て、毫も他人の自由を妨げずして、天稟の才力を伸べしむるを趣旨とす』といっている。

初編につづいて出版された外編は、主としてチャンプル氏 (Chamber) の経済書の翻訳であつて、そこには天賦人權説、自利心論、自由放任論が紹介されている。経済については総論的に触れている程度で、たとえば『経済学は元と人為の法に非ざること瞭然たり。其学の趣旨は自から世に行はるる自然の定則を説くのみ』(外編卷之三)とある。ほかにイギリスではすべての経済事業が会社組織で営まれていることを、かなり詳しく説明している個所があるが(初編卷之一)、これとても、経済の構造そのものに触れているわけではなからう。

以上要するに、新宮涼庭のような蘭医が、その社会経済論において儒学者の域を一步も出ていないのは、少しも怪しむに足らないが、福沢諭吉のように、早くから蘭学に打ちこみ、欧米を見聞し、かつ人權・自由に目ざめた学者も、その思想の根底においては、やはり儒学的な国家観念に支配されていた。この国家観念に立つ福沢の啓蒙的思想は、維新後になつてもいささかも変らなかつた。またここには触れなかつたが、西洋の機械技術を取入れて、最初にその企業化を行った石河正龍や大島高任も、思想家としての彼らを見れば、やはり儒学の根底に立つた西洋思想家であつた。<sup>15)</sup> それほど儒学の浸透には普遍的なものがあつて、いわば当時の日本人のエトスとなつていた。それが、対外関係が切迫するに及んで、先覚者たちに国家的危機意識を持たせた。かくて儒学は、単に洋学振興の土台を培つたばかりでなく、ナシヨナリズムを培つたという意味でも、日本の近代化に大きな役割を演じたといわねばなるまい。そこで、つぎに江戸時代の儒学における国家論を要約的に掲げよう。

(8) 本庄栄治郎解題「本多利明集」(近世社会経済学説大系)による。

- (9) 「日本經濟大典」第三七卷所収。  
 (10) 同上、第三三卷所収。  
 (11) 加田哲二解題「神田孝平・福沢諭吉集」(近世社会經濟學說大系)による。  
 (12) 同上所収。  
 (13) 同上所収。  
 (14) 時事新報社版「福沢全集」卷一所収。  
 (15) 拙稿「近代日本の先驅的企業家」(本誌、第八四卷第三号)

#### 四 儒学におけるナショナルリズム

当時の学者は、日本全体を「天下」と呼び、諸藩のことを「国」または「国家」と呼ぶのがふつうであった。天下を統治するのは天子であり、国を統治するのは国主または国君である。しかし、すでに將軍が天下の統治権者であったから、国君に対して、將軍を大君と呼んだのである。天子または大君と国君との関係については、たとえば「本佐録」に『国主の国を預る事は、天子の天道より天下を預ると同じ、是又万民安穩にして天下の爲めに忠をおもふべし』とあるように、上と下、もしくは全体と部分との関係をもって論ぜられた。

大君たると国君たるとを問わず、一樣に人君であり、その資格は仁君でなければならなかった。熊沢蕃山は「大學或問」のなかで、何が人君の天職であるかに答えて『人民の父母たる仁心ありて、仁政を行ふを天職とす、一國の君には一國の父母たる天命あり、天下の君には天下の父母たる天命あり、……衆の心を得るときは國を得、衆の心を失ふときは國を失ふ』といっている。この言葉からだちに知られるように、人君は天命をうけてその地位に

任じている人であつて、この点ですでにその家来や人民とは出生を異にし、身分を異にしてゐる。

番山はすすんで、『仁政を行ふ事は其人を得るにあり、賢者を位に置き、本才ある人に国政をとらしめ、能者を諸役に命ずる時は、君の仁心ひろくなりて、仁政行はる』(『大学或問』)とのべてゐる。すなわち仁政が行われるためには、人君一人では不可能であつて、必ずや有能の士を執政・諸役それぞれの部署につけねばならぬ。これらの人々がすなわち臣、具体的には武士階級であつて、その天職は君を助けて仁政を行わしめるにあつた。

臣に対して、農工商の三者は民であり、また庶民とも呼ばれた。彼らは衣食住に必要な物資を生産し、有無を相通じることを天職とする階級であつて、その存在の重要性について、たとえば山鹿素行は『君不因民則、身体を養ふこと不全』(『山鹿語類』)といつてゐる。しかしながら、素行がつづいて『民不戴君、其生々を遂げて其全ことを不得』といつてゐるように、民は本来無知なものの、自主性がないものとされてゐた。けれども同時に民は国の本であると説かれた。どのような意味で国の本であるのかは、『本佐録』に『……民は国の本と云ふは、人間は云に不及、いきとし生けるものは食物を以て命をつなくなり、人間の命を養ふ食物作り出す者は民なり、民食世に沢山なれば世間豊なり、世間豊なれば国家長久なり、故に民は国の本なり』とあるによつて明らかである。同じ書物に見えるように、政治の目的は国中の生活物資を豊かにするにあり、庶民の生活そのものを豊かにするにあつたのではない。このことと、民は無智であつて、その生産活動を国家目的に副ふように教え導くのが人君および人臣の天職とされたことを併せ考えると、いわゆる民本主義は民主主義とは全く別物であつたことが知られる。

要するに、儒学における国家構造論は国家有機体説に近いものであつた。詳しくいえば、人君は心であり、民は身体四肢であつて、両々相寄つて一國が形成されているというように考えられていたのである。国家を一個の有機

体とみるからには、当然そこには国家目的があつたはずである。西洋中世思想における国家目的が地上に天国をもたらすにあつたのに対し、江戸時代の儒学におけるそれは、ふつうには、富国強兵であつた。これを太宰春台の言葉にかると、つぎのようである。

『……凡國家を治るには、礼義廉耻の四つにて繫ぐ事、索四筋にて一つの舟を四方より繫ぐが如し。四維の索一つ断れば舟少し動く、二つ三つ断れば弥動く、皆断れば舟漂流して、何くへ往くべきも知れず、國家も亦然也。……此礼義廉耻を守ることは、人民衣食に不乏、上より下迄産業を勤め、用度に事缺ぬ様に成たる上の事也。定まれる産業もなき者は、渡世に差つまりて朝夕の立兼るも理なるに、士大夫以上、増て一郡一國をも領する諸侯などの衣食にさしつまり、用度足らず、妻子家人等を難儀せしむるは、廉耻なきといふ者也。然故に管仲が齊國を治めしは國を富すことを本とせり。國富めば兵を強くすることも易し。因て是を富國強兵の道といふ。富國強兵を覇者の術といふは後世の腐儒の妄説也。堯舜より以來孔子の教に至る迄、聖人の天下を治る道、富國強兵に非るはなし。富國強兵といふ内に、富國は強兵の本也。然れば天下國家を治る人は食貨の道を能々心に懸て、臣民を養ひ、四維を張り、國用軍用厩しからぬ様に思慮せらるべきこと也』(『経済録』<sup>19)</sup>卷五)

もちろん、すべての儒学者が富国強兵を正面に打出してはいたわけではない。たとえば山鹿素行においては、輕租・寛刑・教育によって國民の富と生活の安定を増進し、その天寿を全うさせることが民政の全部であつた。しかしながら素行が『古より民に所取過不及あるは各聖人の道にあらずとするなり』(『山鹿語類』)とか『民の生を厚くして公用足らしむることを以て租税貢賦の本とす』(同書)とかいつているところから知られるように、民生の安定はそれ自身が目的だつたのではなく、公用が不足しないように租税を納めさせて、なおかつ民生が安定していること、すなわち、民という元本を損わないことを条件として國を富ますことが、素行においても國家の窮極の目的であつ

た。

- (16) 「日本経済大典」第三卷所収。
- (17) 野村兼太郎解題「熊沢蒼山集」(近世社会経済学説大系)所収。
- (18) 内田繁隆解題「山鹿素行集」(近世社会経済学説大系)所収。
- (19) 中村孝也解題「太宰春台集」(近世社会経済学説大系)所収。

## 五 五 五 び

以上、時代を維新の前夜までに限って、蘭学―洋学の発達と洋学者の社会経済論を概観し、および、洋学受容の根底に横たわっていたナショナリズムが、もともとは儒学によって培われたものであったことをのべた。簡単にそれを繰返すならば、儒学的教養が人々をして蘭学に目を向けさせたが、とくに対外関係が切迫してのちには、儒学的富国強兵思想の基礎の上に西洋に関する知識を取入れることによって開明された人々が指導者の地位につき、やがてわが国の近代化を推進することになったのである。

その近代化の過程において行われた変革運動が明治維新であった。したがって、明治維新は天皇絶対制の樹立を目的として行われたものではなかった。すなわち、単なる絶対主義革命ではなかった。また、単なるブルジョア革命でもなかった。というのは、当時の人々にはブルジョア社会については何らの知識もなく、あったのはただ西洋諸国の経済的繁栄が商工業に依存していることの認識だけだったからである。

思うに、西洋においても、資本主義社会の構造や特質が学問的に明らかにされたのは、資本主義が機構として確

立してのちのことであつて、幕末の日本人の耳目に触れた西洋の社会は、それが確立される前、すなわち人体において十九世紀中ごろまでの社会であつた。すなわち、近代的商工業を基礎として経済的に繁栄した姿、およびその前提たる身分および職業の個人的自由の状態が、とくに神田孝平や福沢諭吉に強くアッピールしたのである。

しかしながら、神田は開成所の教授であり、福沢は上野戦争の砲声をききながらウェーランドの経済書を講義していた学者であつて、ともに維新の変革運動に関係がなかつた。変革運動を担当し指導したのは、儒学的教養の上に、多少ともに西洋の近代文明に関する知見をもつた人々であり、日本の危機を強く感じた人々であつた。こうして、欧米化を主たる内容とする近代化を目標として、維新の変革が行われ、新政府が樹立せられたのである。別の見方からすれば、江戸時代の儒学および儒学的教養の上に取入れられた洋学は、相寄つて、維新における指導的人格——いわゆる和魂洋才的人物——を養成したという意味で、日本の近代化にすこぶる重要な役割を演じたといわねばならぬ。